

どてらごや

第 7 号
平成21年4月
瑞宝山 不動寺
TEL 75-4862
【参加無料】

丑年 牛と植物

高野山高等学校元校長
亀岡弘昭先生



丑年になってもう4ヶ月過ぎました。「丑」は紐をもととし、万物が紐でしっかりと結びれ固定された状態を表し、植物を例にすれば、花では蕾がまだたく、種子でも芽となる胚珠という部分に動きがなく、発芽の準備期間である。というように表すのだそうです。

牛は、大きな体、牛の歩みというほどで、足は遅く、ゆったりと辛抱強いのですが、牛の一散といい、突然に暴走・暴行をすることも。日常は食べるか寝そべる、寝そべっているときも反芻して口を動かしています。耕耘機が普及する以前は各農家で1~2頭の役牛を飼っていました。

現今の牛(肉牛・乳牛)は栄養価、価格の高い飼料が与えられていますが、当時の牛の飼料は山谷の草が主で、その牛の草刈りが、露のある朝飯前の大変な毎日の仕事でした。背丈以上もある草を刈り、一抱えほどの束にして背負子に山のように積み上げて運ばれていました。

牛の草のうち、ススキやクズが思い出されます。

私の生まれた西伊予(愛媛県)の山里の農家は、母屋、そのとなりに土蔵(くら)、そのとなりにだや(駄家・駄屋)とそれらとは少し離れたところにへや(隔屋)という隠居した人の住居がありました。

牛はそのうちのだやという建物のうちの1頭あたり二間四方ほどの昼間でも薄暗い、風通しもよくない部屋で飼われていました。

草を刈ってくるると牛が早速欲しがり部屋中をぐるぐる歩き間あるので、草束を解いてそのまま投げ込むということもありました。

普通は牛桶という木製の箱の上に、はみきり(食べ物切り)という50~70cmほどの上向きの刃のついた器具で10cmほどに刻んで与え、ときには野菜の葉や芋なども刻み、米ぬかなども混ぜていま

た。

牛部屋には草や稲ワラと牛糞の混ざったものがたまりますので、時折、鍬でかき出し堆肥場で発酵させて、当時としては上質の有機肥料としていました。

牛の草の供給地、採取地の多くは、いわゆる里山でした。春にはたくさんの山菜が生え、きれいな花をつける山野草も豊富で、クヌギ、アベマキ、クリ、ナラガシワなどドングリの成る落葉広葉樹は大切に、順番に伐って薪炭材などに利用し、野生動物とヒトの生活の、なわばりの緩衝地帯の役割もしていました。人がうまく手を加えることにより、豊かで生き活きた自然が作られる見本ということが



ことができます。

なお、牛の外部寄生虫駆除のために、高野山では春の法会ころに壇上伽藍の周辺でも白い花をつけはじめるツツジ科のアセビ(馬酔木)の葉の煮汁を用いましたので、「たでしば」の方言名もあります。



また役牛はある程度成長すると鼻の穴に木製の鼻輪をつけたのですが、その鼻輪の材としてはバラ科のカマカツが最適とされていたそうです。

そのカマカツについては、大正八年~昭和九年、高野山中学(高野山高校の前身)の博物担当教諭として務められ、現東京農工大学教授就任のため退職されるまでの間、高野山で多くの植物を発見された、沼尻好先生(故人)が、奥の院東方のこの木の幹に着生していた地衣類の新種を発見されたことも記憶にあります。

牛は、かつては私たちの身近な動物であったため、ウシハコベ、ウシホウズキ、ウシノヒタイ、ウシアザミなど、和名や別称、あるいは方言にウシ(牛)の名のついた植物も数多くあります。

(高野山時報より転載させていただきました)

※亀岡弘昭先生は高野山高等学校の元校長先生。現住森田良恒の高等学校時代の恩師で、現在、紀美野町にある惣福寺のご住職です。

(来年3月まで県立博物館で高野山の植物展開催)

土寺小屋のご紹介

現在、

土寺小

屋では

般若心

経の解

説(行き

つ戻りつ

でなかな

か進みま

せんか)

とお写

経を中心

に勉強(?)

して



いつでも自由に参加できますので、どうかと遠慮なくお越し下さい。

不動寺ホームページのご紹介

Webページでは不動寺の歴史、土寺小屋や初不動大祭、子どもみこしのスライドなども掲載しています。

一度のぞいてみて下さい。

【Web】<http://www.justmystage.com/home/fudoji/>